

今後の日本のロータリー は、どうあるべきか

第 2800 地区

池田 徳博ガバナー
(鶴岡西RC)



12月末日時点での会員数は1,622人と、7月1日時点の会員数から40人の増員となっています。

各クラブ、ブロックにおいては「ロータリーデー」に取り組み、奉仕活動を行うことによるロータリーの広報が、各イベントごとに実施されました。

また、初めての試みとして、11月にテレビ27回、ラジオ35回ロータリーについてのコマーシャルを放送しました。ロータリアン自身や一般の方々のロータリー活動への理解が深まったかと思えます。

地区大会においては、日本人の精神とロータリーの中核理念である「親睦」との融合を図る試みとして、宗教学者・山折哲雄氏の記念講演を一般公開かつロータリーデーの催しとして実施し、竹腰兼壽国際ロータリー会長代理から一定の評価をいただけたかと思えます。

そして、ロータリーの中核的価値観の中の「親睦」と「奉仕」との関係についてですが、「親睦」は、畏友関係と言ってもいいのではないかと思います。互いに尊敬し合い、高め合う、濃密な関係形成であると思うのです。他方、「奉仕」は、「親睦」によって高められた人格が、ロータリーの外に向けられた場合、自ら発露する行動です。また、その「奉仕」によって、人格がさらに陶冶され、その素晴らしい資質が、ロータリーに戻されるという循環になるのでしょうか。

ロータリーは、ユニセフ(国連児童基金)やWHO(世界保健機関)に、取って代わる必要はありません。あくまで、「親睦」による、昇華のための活動なのではないでしょうか。それは、日本における「道」です。このような見え方をすることによって、今、100周年を迎えようとする、日本のロータリーの、本来のあり方を定め直すことができるのではないのでしょうか。

(弁護士)